

## 2016～2017年度 関西大学研究拠点形成支援経費研究成果報告書

著者	与謝野 有紀, 林 直保子, 林 武文, 井上 卓也, 田中 孝治, 池田 満, 堀 雅洋, 菅原 慶乃, 中谷 伸生, 山本 卓, 山本 登朗, 坂本 美樹
雑誌名	関西大学研究拠点形成支援経費研究成果報告書
発行年	2019
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/00017635">http://hdl.handle.net/10112/00017635</a>

2016～2017 年度  
関西大学研究拠点形成支援経費  
研究成果報告書

「地域文化資源をプラットフォームとした  
地域共同活動の創生拠点形成」

期間：2016年4月～2018年3月

## 研究組織

### 研究代表者

社会学部・教授 与謝野有紀

### 研究分担者

文学部・教授 菅原慶乃

文学部・教授 中谷伸生

文学部・教授 山本卓

文学部・教授 山本登朗

社会学部・教授 林直保子

総合情報学部・教授 林武文

総合情報学部・教授 堀雅洋

## 目次

- ・ 研究成果の概要
- ・ 第一論文 「信頼の革新、間メディア・クラックおよびリアルな共同の萌芽」\*  
(与謝野有紀、2018年1月、『ソーシャルメディアと公共性』遠藤薫編、東京大学出版会：97-123.)
- ・ 第二論文 「絵画鑑賞の社会・心理的要因に関する計量的検討」(林直保子・与謝野有紀、2017年10月、『関西大学社会学部紀要』49(1)：63-85.)
- ・ 第三論文 「全天球映像と球面ディスプレイを用いたインタラクティブコンテンツの開発 ―古墳をテーマとした地域連携事業への展開―」(林武文・堀雅洋・井浦崇・平尾修悟、2018年2月、『知覚情報研究会資料』P-1-18-15：41-46.)
- ・ 第四論文 「展示解説におけるストーリー性が来館動機に及ぼす影響について ―古代史系博物館での学習支援を目指して―」(井上卓也・田中孝治・池田満・堀雅洋、2018年8月、『知識共創』8(Ⅲ6)：1-7.)
- ・ 第五論文 「吹田の人形芝居・出口座の公演音声・映像資料について―解題と考察」(菅原慶乃、2018年2月、『文學論集』68(3)：31-73.)
- ・ 第六論文 「長澤蘆雪と大坂画壇」(中谷伸生、2019年3月、『東アジア文化交渉研究』12：3-21.)
- ・ 第七論文 「『忠臣規矩順従録』小攷」(山本卓、2019年3月、『国文学』103：265-274.)
- ・ 第八論文 「古今和歌集の「誹諧」と「俳諧」」(山本登朗、2017年10月、『国語国文』86(10)：1-11.)
- ・ 謝辞

### 【付録】

- 「『隣女和歌集』巻一の基礎的考察」(坂本美樹、2018年3月、『國文学』102：89-100.)
- 「新出資料・林原美術館所蔵『隣女和歌集』(巻一)三本の紹介」(坂本美樹、2017年3月、『関西大学博物館紀要』23：1-22.)

\* 第一論文は、レポジトリ登録にあたり、当該書籍に収録された論文の最終稿を東京大学出版会の許可を得て掲載した。

## 研究成果の概要

本研究は、社会科学、人文学、情報工学の連携のもと、地域の信頼を醸成し、それによって社会課題に取り組む基礎を構築するという目的をもった学際研究として構想された。ここに収録した研究代表者、研究分担者の論文は、それぞれがこの目的と関連したものとなっている。

ただし、本研究プロジェクトは実践的な側面を構想時から大きく含んでおり、学術論文のみではその全容が理解しがたく、また、各研究分野の協力関係と相互作用を理解することも困難とも想定される。そこで、まず研究全体の展望をここに記載したい。

本研究は、当初の研究構想に対応する形で、大きく3つのパートに分かれて展開した。

社会学、社会心理学を専門とする社会科学パートは、信頼の概念を再検討し、さらに、地域の文化資源が、社会的信頼感の醸成を促すかを計量的に研究することを主とした。また、他のパートの研究者と地域との接続や、他のパートがこれまでに培ってきた地域との連携（いわゆる「社会関係資本」）を具体的に動かす実践的な役割を担った。

国文学、美術史、映像文化学を専門とする人文学パートは、これまでの研究知識・技能を、社会学パートがアクセスをサポートする地域資源に適用し、あるいは、地域の文化課題を掘り起こし、社会科学パートと共同でこの問題の解決を試みる実践的研究を推進した。また、社会科学パートに脱落している、古典テキスト内での信頼概念につながる事象の掘り起こしと整理も担当した。

知識情報学、視覚情報処理を専門とする情報工学パートは、人文学パートが掘り起こし、社会科学パートが地域への知識還元を試みる際のICTをもちいた技術的支持と、地域社会とICT技術をつなぐ社会実験的試みを展開した。

ここに収録した論文は、こうした連携研究の一部を構成するものであり、プロジェクト全体の関わりにおいては、以下の4つの類型に整理できる。

すなわち、

類型1．人文学、情報工学パートの知見を背景にした、地域と信頼をめぐる「社会科学パートの実証的研究」（以下所収、第一、第二論文）

類型2．ICTで地域文化への理解を促進する「情報工学的パートの実験的研究」（以下所収、第三、第四論文）

類型3．社会科学パートの多種エージェントの接続技能、情報工学パートのICT関連知識のサポートをうけた「地域資源掘り起こしとその維持を可能とする地域ネットワークの構築を生む人文学パートの実践的研究」（以下所収、第五論文）

類型4．社会学パートの理論的検討を深める背景を与えたり、地域文化資源の掘り起こし活動の基礎知識を構築するテキストや絵画に関する「人文学パートの文

献・資料研究」(以下所収、第六～第八論文)  
である。

それぞれの研究者が相互作用しながらも自立的な研究を展開してきたが、特に、上記3にあたる研究は、学際研究として今後重要なモデルとなる要素を含んだものとなっている。以下、手短に各論文の概要と本研究プロジェクトでの位置づけについて記載する。

第一論文「信頼の革新、間メディア・クラックおよびリアルな共同の萌芽」(与謝野、2018年1月)は、『ソーシャルメディアと公共性』(遠藤薫編、東京大学出版会)の第4章として書かれたものであり、ICTの進展に対応して、間メディア・クラックと呼ぶべき現象が生じていること、さらには、それを埋め合わせるように「親密圏」が地域に生まれ始めていることを初めて示した。また、信頼の爆発と呼ばれる現象が、社会学者が誤って想定しているような「一般的信頼」といわれる人間一般への信頼ではなく、特定個人への信頼感であることも初めて整理した。こうした先進的な実証と議論は、本研究支援経費の助成を受けた分析と聞き取りがあって初めて可能になっている(論文中の注9、注13に記載)。さらに、信頼感の研究は、相手の意図に対する推測の研究であるが、第七論文『『忠臣規矩順従録』小攷』(山本卓、2019年3月)に記載された『忠臣規矩順従録』における人々の意図に関する山本卓氏の議論から刺激をうけるところがあり、研究代表者個人として、古典的テキスト研究と社会科学的研究のインターコースの学術的重要性に気付く機会となっている。

第二論文「絵画鑑賞の社会・心理的要因に関する計量的検討」(林直保子・与謝野有紀、2017年10月)は、本プロジェクトの動きを前提として、地域の写真の掘り起し展示のほか、大阪の老舗料亭・花外楼との共同でデジタル展示を行い、大坂画壇の絵画鑑賞が地域への愛着の醸成につながるかを検討している(論文中の注1、注7)。花外楼の所有する絵画、約20点について、人文学パートの研究者である中谷教授の支援を受けてICTによる提示刺激を選定し、また、情報工学パートの研究者の示唆を受けて、社会科学パートが独自に絵画提示刺激作成プログラミングをしたうえで、大学が所有していた天神橋筋商店街の施設リサーチ・アトリエにおいて調査・実験をおこなったものである。絵画鑑賞の実証的社会心理学的研究としては嚆矢ともいえるものであり、社会科学パートによって作成された論文ではあるが、3つのパートの連携が生み出した成果とみなすこともできる。

第三論文「全天球映像と球面ディスプレイを用いたインタラクティブコンテンツの開発ー古墳をテーマとした地域連携事業への展開ー」(林武文・堀雅洋・井浦崇・平尾修悟、2018年2月)は、堺の大仙古墳などをドローン撮影し、全天球型デジタル画像にしたものを球面ディスプレイに投影し、その展示をグランフロント大阪・the Labで行ったものを基礎にしている。このようなICTによる革新的展示が、地域への興味を惹起するかどうかの聞き取りをもとに質的に検討している。ICTでの地域資源の提示という点では、第二論文と共通のテーマをもったものとなっているが、第二論文が計量分析を主としているのに対し、ICT技術の可

能性を明らかにするところに重点がある点で、それぞれ別の展開を見せている。また、前述の第二論文で用いた ICT 技術を用いた展示では、本著者の林武文教授と第二論文著者の林直保子教授が継続的に連携してきており、この状況をもとに相互刺激的に研究が展開してきたものといえる。

第四論文「展示解説におけるストーリー性が来館動機に及ぼす影響について—古代史系博物館での学習支援を目指して—」（井上卓也・田中孝治・池田満・堀雅洋、2018年8月）は、堺市博物館などでの提示刺激の差（ストーリー性のある提示と、時代順の展示）で、対象への興味、博物館へのコミットメントがどのように変化するかを検討したものである。地域資源に対する愛着が ICT を用いた刺激の内容でどのような差異を生むかを検討しており、この点では、第二、第三論文と共通の問題設定の基盤を有している。ただし、ここでは、教育といった側面が明示的に意識されており、ストーリー性以外にも、クイズ形式での学習といった ICT を用いた仕組みづくりがなされている。結果としては意外なことに、もともとの興味関心が低い対象に関しては、ストーリー性がない場合の方が、愛着を醸成しやすいという結果になっているが、文化資源への愛着と地域信頼の醸成というテーマからは、興味深い検討課題が提供されている。

第五論文「吹田の人形芝居・出口座の公演音声・映像資料について—解題と考察」（菅原慶乃、2018年12月）は、1973年から25年間にわたって吹田市内で活動を続け「関西一円の人形劇文化の一翼を担った」出口座の公演記録（音源データ）の解題と考察に焦点を当てた論文である。出口座は、高い操作技術が必要なマリオネットを用いたアマチュア人形劇団であり、その一事をもってしても大きな歴史的な特徴を有しているが、その公演記録は、日本における近代人形劇史の創成期の息吹を現代に伝える貴重な橋渡しの役割を持つものとして貴重なものといえる。本論文は、このような歴史的な資源の掘り起し、解題、整理という点で文化史的に大きな意味を有しているが、それにとどまらず本プロジェクトの目標を期間内に達成した研究となっているところに特徴がある。

本論文 32 頁に、

筆者は、関西大学戦略的基盤形成事業「社会的信頼システム創生センター」の助成と協力を受け、山下氏を始めとする出口座の元座員の方々、吹田市立中央図書館、そして本学を結びつけ、本学の地元・吹田市における庶民の文化遺産の継承の方法を模索した。こうして、山下氏が保管する出口座の公演音声テープ、映像資料の修復、デジタル化を遂行するに到った。

と記載されているように、この研究は、地域住民、行政、大学を結び付け、地域文化資源のデジタル化を実現し、地域文化資源の保存、公開、研究を可能としたところに、本プロジェクトの当初目標を達成した大きな成果があると考えている。この研究は、破損しかかった音声、映像テープを大学が行政と地域住民をつなぎながら、高音質のデジタル化をできるかという挑戦であり、その成果としての公演記録の解題、整理となっている。プロジェクトの社会科学パートが情報工学パートや学外企業との連携を模索し、情報工学パートがこうした技術への助言

を与え、プロジェクト RA・中島小巻氏が修復事業を具体的に推進した。論文の背景に、こうしたパート間の相互連携があったことも付言しておきたい。

第六論文「長澤蘆雪と大坂画壇」（中谷伸生、2019年3月）は、中谷教授の主要研究テーマの一つである大坂画壇研究の流れの中にあるものであるが、ここで言及されている大坂画壇の画家たちのいくつかの作品は、前述の林教授による第二論文における実験刺激提示の超高精細デジタル画像としても用いられている。大阪の老舗料亭・花外楼の所有する大坂画壇の絵画のいくつかは、こうした中谷教授の知見をもって選択されている。この点では、前述の類型4「社会学パートの理論的検討を深める背景を与えたり、地域文化資源の掘り起し活動の基礎知識を構築するテキストや絵画に関する研究」にあたっており、本プロジェクトにとって重要な意味をもつ知見の一部が本論文でも整理されている。

第七論文「『忠臣規矩順従録』小攷」（山本卓、2019年3月）も、第六論文同様、類型4にあたる。ここでは、『内侍所』の改作である『忠臣蔵規矩順従録』における、悪役・大野九郎兵衛、熱血の忠臣・大石主税、深謀遠慮にして沈着冷静な忠臣・大石内蔵助の三者の対比構造が整理されている。大野九郎兵衛への残酷とも言うべき死にざまの描き方と、現代とは異なるその描写への共感、さらには、主税に対する内蔵助の内心を示さない態度などは、すでに挙げた第一論文における信頼や共感をめぐる議論に刺激を与えるものとなっている。前述の通り、古典的テキストをめぐる人文学の知見がもつ社会科学への刺激の重要性を認識させるものとなっており、信頼と評判という第一論文の主要素の一つをめぐって、基礎的な理論的刺激を与える議論の一部がここに整理されている。

第八論文「古今和歌集の「誹諧」と「俳諧」（山本登朗、2017年10月）それ自体は、第六、第七論文同様、類型4に位置付けられる。ここでは、「誹諧」の読み方と解釈を巡って、この語に限って「誹」の字は「そしる」の意味で用いられているのではなく、また、よみも「そしる」に対応して「ひ」とするべきではないことが論理的に整理される。誹諧を「ひかい」とする説、さらには、そのもとでのこの語を解釈することが「俳諧」と「誹諧」の文学上のニュアンスの差異を失わせてしまうこと、そして、古今和歌集における「誹諧」においては、「誹」の字は「俳」の異字体と解釈すべきことが述べられる。

ところで、山本登朗教授は、本プロジェクトに途中（2017年3月）より参加いただいている。それは、こうした広範な古典テキストに対する知見をもとに、本学と連携協定を結んでいる林原美術館の所有する池田家文書の発掘とその評価に参加いただくことが必須となったためである。また、参加いただいた結果として、池田光政公、綱政公の手になる『隣女和歌集』の歴史的発見につながった。これらの成果は、本プロジェクト RA・坂本美樹氏によって「新出資料・林原美術館所蔵『隣女和歌集』（巻一）三本の紹介」、「『隣女和歌集』巻一の基礎的考察著」の二編の論文（付録として収録）に纏められているが、坂本氏の論文は、本論文にその一部が示された山本登朗教授の古典テキスト解釈の力量とそのサポートをもって実現している。本論文に示されたすぐれた古典テキスト解釈の視線は、林原美術館の所有する池田家文書の検討と、いわば「殿様の文事」という未開拓の



分野への切込みへと展開した。ただし、当該研究は、2018年度からの本学「教育研究緊急支援経費」へと接続的に引き継がれるという特殊事情から、論文としてはここに収録されていない。この点、本論文自体は第4類型となっているが、この研究の背後に、類型3「地域資掘り起しとその維持を可能とする地域ネットワークの構築を生む人文学パートの実践的研究」があることをあえて付言しておきたい。

上述の通り、社会科学パート、情報工学パート、人文学パートはそれぞれの分野での業績を相互刺激的に出力し、上記のとおり4つの類型に纏められる論文を成果としている。以上、本プロジェクト成果の概要と展望を記載した次第である。

研究代表者

社会学部・教授 与謝野有紀